

# 「富士登頂 年間200回を4年続ける」

登山家・実川欣伸(よしのぶ)69歳

NHKTV  
2012年10月21日  
日経新聞他

2011年12月、日本山岳会の会合で、会長特別表彰として、1943(昭和18)年生まれの実川欣也さん(静岡県沼津市に住む)が紹介された。1985年、42歳の時、家族そろってお盆に富士山(3776メートル)に登った。これが実川欣伸の富士山初登頂であった。その後、90年代後半から富士山に取りつかれたように登り始める。

2011年には1111回の登頂を成し遂げている。4年連続して、1年間200回登頂の偉業をなす。

實川さんは壇上の挨拶のなかで、日本橋からスタートして43時間で富士山頂にたどり着いたという。

海岸から村山古道を通り18時間で登るとか、4つのルートを一筆登山をすとか、東海道53次を歩いてきて富士登頂を果たすとか、多彩である。

彼は単なる回数稼ぎの登山ではない。強靱な精神力と意欲的な新チャレンジに対して、出席した登山家たちの誰もが賞賛と驚嘆の声をあげていた。

「子供のころから歩くのが大好きだった。小学校5、6年ごろから学校が休みの日は、食パン半斤にピーナツバターやジャムをつけたのを持って、日が暮れるまで磯子の三溪園などを歩き回っていました」。

育ったのは横浜市鶴見区。日本鋼管や旭硝子など工場地帯のど真ん中だった。中学ではガキ大将で、相撲も強く、陸上の400メートルでは横浜地区でトップ。健脚ぶりは際立っていたが、勉強の方は「全然なかったからさっぱりだった」。



働きながら鶴見工高の定時制へ。途中で転校し、劇団で役者を目指したりしたが、友人の薦めで法政二高に編入した。若い時は奔放で「嫌になるとすぐ辞める癖があった」。高校は卒業まで6年かかった。

仲間に好かれ、足が速かったことから道が開け、法大法学部に入學する。もっとも大学では、勉強そっこのけでアルバイトに熱中したために留年し、5年間通った。

山との最初の接点は定時制高校時代。就職した会社に山岳部があった。ところが「会社の山岳部は丹沢の沢登り専門、自分は自然が好きでキャンプのテントが借りたくて入ったんです。高所恐怖症だから、みんなが沢を登っているときは、尾根を登って山頂で合流する。その程度でした」。大学でも奥多摩などでキャンプを楽しむ自然派だった。

大学を出て大手紳士服会社に就職したが、忙しいのは季節の変わり目だけで「こんなの仕事じゃない」と半年で退社。その後は建設会社の現場監督、営業などを転々。

35歳の時、現在住んでいる沼津に移り、3人の子育てのために三島市にある東レの下請け会社の電子部で猛烈に働いた。鶴見からも富士は見えたが、ここも目の前の愛鷹山の上にとよこんと富士が鎮座して美しい。それでも低山の伊豆山系の方に魅力を感じて、休みには子供たちを連れてよく登った。

伊豆の全山、箱根を極めたいと思った頃だった。毎年やってくる中国の研修生が「富士山に登りたい」という。その声に山好きの実川が応えた。富士との深い縁が結ばれる。

2012年8月、沼津市在住の登山家、実川欣伸(よしのぶ)さん(69)の富士山登頂回数が、1300回を突破した。第三者による記録が残る一般登山家としての登頂記録を連日更新。伝説の強力(ごうりき)、梶房吉さんが達成したとされる「1672回」を当面の目標に、5年連続の年間登頂200回以上にも挑んでいる。

今季は2012年8月13日までに90回登頂し、通算記録も1302回に伸ばした。1300回目の登頂は8月11日だった。「梶さんの記録を来年中に抜きたい」と、今季の目標を250回登頂に設定。来季211回登頂すれば、梶さんが50年間で達成したとされる記録を初登頂(85年8月)以来28年で抜く計算だ。

その後は、登頂2230(ふじさん)回を目指しつつ、合わせて数年のうちにはエベレスト(8848メートル)にも挑戦する予定。ヒマラヤの天候が比較的安定する10月ごろ、一度登頂して別ルートから下山し、もう一度登り直す「エベレスト2登」を無酸素で達成しようと計画 중이다。

ガイド登山の仕事が増え、テレビ番組でも引っ張りだこの実川さん。

「スポンサー集めを頑張って、ぜひエベレストも成功させたい」と話している。【